

**PA-21.****Jリーグクラブチーム下部組織における5年間の外傷・障害**

(整形外科学)

○山藤 崇、山本 謙吾、香取 庸一

【目的】 Jリーグクラブチームの下部組織において5年間に発生した外傷・障害を明らかにし、それらの結果をもとに発生原因・予防方法を検討したので報告する。

【対象】 1999年から2003年までの5年間に、Jリーグクラブチーム下部組織のジュニアユースチーム(以下J群)とユースチーム(以下Y群)に所属した選手J群272人・Y群173人の合計445人である。

【方法】 5年間で発生した外傷・障害はJ群172件・Y群185件の合計357件であり、これらを分析しJ群・Y群との比較を中心に検討した。

【結果】 J群では骨折・骨端線損傷、骨端症、腰痛症の順に、Y群では挫傷、足関節・足部靭帯損傷、膝靭帯・半月板損傷の順に多く、年間一人あたりの発生件数、および外傷・障害のうち外傷が占める比率はともにJ群に比べY群に高かった。J群はY群に比べ外傷より障害の発生率が高く、骨端症・腰痛症が多くを占めた。発生件数を部位別にみるとJ群・Y群とも下肢・体幹・上肢・頭頸部の順であり下肢が7割以上を占め、下肢ではJ群・Y群とも足部・足関節が最も多かった。外傷・障害の月別発生件数にてJ群の障害発生件数が2月に集中していた。また、試合中の外傷の発生件数が練習中の外傷の発生件数を大きく上回り、Y群に顕著にその傾向が見られた。

【考察】 一人あたりの外傷・障害の発生件数、外傷・障害における外傷の割合はJ群よりY群に多く、これらは身体発達に伴う「骨格・筋力・スピード」の増大やコンタクトプレーの激しさなどが原因として考えられた。J群ではY群と比べ障害の発生件数が多く、「休みあけ」である2月に障害発生が多かった。今後、「休み明け」の練習量・練習時間の短縮や「休み中」のストレッチング・筋力トレーニングの推奨など予防方法を工夫していくことが必要である。これらの結果に更に検討を加え、サッカーを中心としたスポーツ現場へフィードバックしていくことが、今後の課題である。

**PA-22.****脛骨高原骨折の手術成績**

(整形外科学)

○馬嶋 正和、宮島 久幸、高瀬 勝己  
松岡 宏昭、鈴木 秀和、反町 武史  
山本 謙吾

【目的】 脛骨高原骨折は関節内骨折であり、関節面の正確な整復と、良好なアライメントの獲得が重要である。1989年以降、当科において観血的治療を行った脛骨高原骨折の術後成績について検討した。

【対象】 症例は64例65肢、男性38例、女性26例、年齢は16歳から84歳、平均年齢49.2歳である。受傷原因は、交通事故が34例53%と最多で、次いでスポーツ外傷、転倒・転落の順に多かった。経過観察期間は6から74ヶ月、平均20ヶ月であった。骨折型はHohl分類でTotal depression typeが18例と多く、順にLocal depression type 15例、Split depression type 14例、Comminuted type 13例、Undisplaced type 3例、Split type 2例であった。内固定材料としては、plateやScrewを用いた症例が64例99%であり、その内38例58%に骨移植を併用している。

【結果】術後評価としては、JOA-Score、Hohl&Luckの治療成績評価基準を用いた。JOA-Scoreは平均86.2点であり、Hohl & Luckの判定基準では解剖学的評価で6例9%、機能的評価で10例15%にFair例が見られた。Poor例は見られなかった。成績不良例の詳細を検討すると、骨折型では、複雑で整復位保持の困難なSplit depression typeが4例33%、Comminuted typeが5例42%と多く、Hohl & Luckの解剖学的評価としては術後、10。以上の外反膝変形が残存した症例が4例67%と最多であった。また、機能的評価では側方不安定性を来した症例が7例58%と多く、成績不良につながる因子になると思われた。しかし、外固定期間は平均33.2日、可動域訓練開始時期は平均29.8日であったが成績良好例と比較しても明らかな有意差は認めなかった。

【考察】 高度関節面の陥凹を伴う症例や整復位保持困難な症例に術後成績不良例が見られ、手術法として関節面の整復と外反変形に注意し、靭帯の修復を含めた強固な固定力を得る事が必要であると思われた。